

## 【研究論文】

# 新仏を祀る盆棚

— 徳島県美馬郡半田町の事例より

高橋晋一・黒田幸子

### 一 はじめに

お盆に死者の霊（先祖・新仏・無縁仏）を祀るために臨時に作られる祭壇のことを「盆棚」と呼ぶ。盆棚祭祀のあり方は、日本人の祖霊観の構造と変容の過程を解明する上で重要な手がかりになると考えられ、柳田國男以来、多くの研究者によって取り上げられてきた<sup>1)</sup>。これまでの研究では特に、新仏や無縁仏は先祖とは別の場所に（盆棚を設けて）祀られることが多いことに関心が集まり、その祀られる場所の特質や、別の場所に祀られる理由、祀られる場所の変遷などに関する検討がなされてきた。

小松（喜多村）理子は、全国の新仏を祀る盆棚の事例を比較検討した結果、新仏を祀る地点（場所）には全国的に共通する特色はなく、盆棚の位置から見る限り、その土地土地に限られた区別の仕方に過ぎない<sup>2)</sup>。「小松一九七六 二五～二六」と論じている。また、祖霊祭祀のあり方（特に祖霊の迎え方・送り方）は地域によって多様であり、その論理に一貫性・整合性を見いだすことは困難であると述べている<sup>3)</sup>。「喜多村 一九九八 一七四～一七六」。

つまり、新仏を含めた祖霊祭祀のあり方は、結局「その土地の論理」により相対的に決定される部分が大きいという話になるのだが、それでは「その土地の論理」とは何かというと、その点については十分な議論がなされていないとは言い難い。

従来の盆棚研究の多くは、広域（全国、あるいは都道府県レベル）のデータ（とりわけ盆棚の位置とそこに祀られる霊の種類）を比較検討する中から、日本人の祖霊観の構造と変遷に関するより抽象度の高い一般モデルを構築しようという志向性が強く見られる。しかし、喜多村が言うように盆棚祭祀の形態にはかなりの地域差が見られるとすれば、こうした一般化を目指す方向と同時に、議論の対象とする地域を限定して詳細なフィールド・データを収集し、事例間の共通性と差異を比較検討する中から当該地域の盆棚祭祀のあり方の特質を浮かび上げさせ、さらにはそのような特定の祭祀形態を生み出す背景となった「その土地の論理」の内実を検討する（言い換えればその土地の祖霊観を探る）作業もまた重要なのではないだろうか。そうした作業を積み重ねていく中で、より精緻な、日本人の祖霊観に関するモデルを構築していくことができると考える。

徳島県美馬郡半田町では、お盆に新仏を祀る盆棚を屋外に設け、祭祀を行う習俗が見られる。筆者は半田町の各地で新仏を祀る盆棚の調査を進めていくうち、面積五一・七九km<sup>2</sup>というさほど広くない半田町の中でも、新仏を祀る盆棚の名称や形態、新仏の祀り方やその意味付けにかなりのバリエーションが存在する(もちろんその一方で共通性もみられる)ことに気付いた。それではこうした(当地特有の)祭祀形態を生み出した要因は何だろうか。本稿は、半田町(より正確には、行政単位としての半田町と言ふよりは一つの文化圏としての「半田川水系」と言った方がよいかもしれない)を事例として、新仏を祀る盆棚の祭祀形態を規定する要因を、地域的コンテクストをふまえながら考察しようという試みである。

筆者は、二〇〇二年八月八日〜一六日にかけて、半田町全域において新仏を祀る盆棚の調査を行った。なお、今回の調査は半田町の新仏祭祀の全体像を把握するために行ったものであり、データの制約から、本稿における議論は、今後半田町の盆棚祭祀に関する研究を進める上での予備的な考察にとどまることを最初にお断りしておきたい。本稿では、筆者調査の一例に文献研究で得られた四例を加えた、計一五例の事例をもとに検討を加えていくことにする。

徳島県内でも、お盆に新仏を祀る盆棚を作る習俗は近年急速に消滅しつつあり、現在では吉野川中〜上流域の一部、および那賀川流域の一部に見られる程度となっている。その中でも半田町では、(徐々に衰退しつつあるもの)現在もなおほぼ全域にわたりこうした習俗が残されている。また先に述べたように盆棚の名称・形態・祭祀場所・新仏の去来に関する観念などのバリエーションも豊富であり、研究対象地域として取り上げるのに適切であると考えられる。

半田町は徳島県西部、吉野川中流の右岸に位置している。町の中央部を

吉野川支流の半田川(延長一四・三km)が北流し、その中流〜上流域では大藤谷川・東谷川などの支流が枝を伸ばしている。半田川両岸には盆地が展開するが、周辺地域は四国山地北斜面の傾斜地となっている[角川日本地名大辞典編集委員会 一九八六 九四五〜九四六]。

## 二 新仏を祀る盆棚の事例

ここでは、筆者の調査、および既存の文献により、半田町における新仏を祀る盆棚、およびその祭祀儀礼の現状を紹介する(事例一覧を表1、分布状況を図1に示した)。データは、次の七項目に整理して記述する。

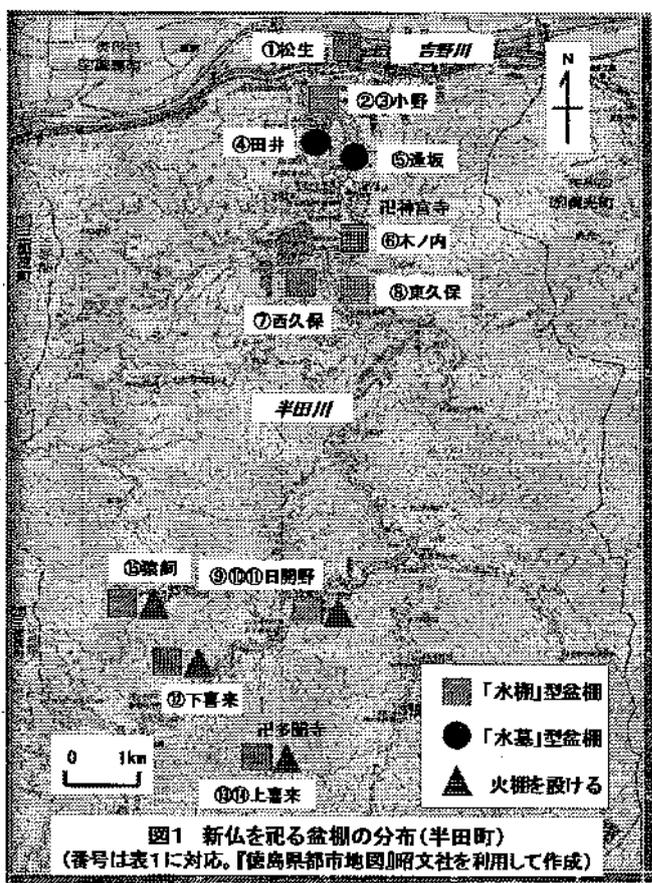


図1 新仏を祀る盆棚の分布(半田町)  
(番号は表1に対応。『徳島県都市地図』昭文社を利用して作成)

表1 新仏を祀る盆棚の事例(半田町)

事例番号	地名	盆棚の名称	祭祀対象	盆棚の設置場所	盆棚の形態	水辺で祀る理由	火とぼしの有無	新仏の迎え方	新仏の送り方	家の中での新仏祭祀	権那寺	備考
1	松生	水臺	新仏	川原	竹製の棚	不明	なし	データなし	データなし	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	小松、1976
2	小野	水棚	新仏	川原	竹製の棚	流れるものは流れるという考え方	なし	水棚を川原に立てる	水棚の脇で火を焚く	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
3	小野	水棚	新仏	川原	竹製の棚	不明	なし	水棚を川原に立てる	データなし	盆の期間中のみ祭壇を作る	不明	笠井、1957
4	田井	水臺	新仏	川原	積み石	仏は川原づたいに戻ってくから	なし	水臺を作る	水臺の脇で火を焚き水臺を焚す	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
5	逢坂	水臺	新仏	川原	積み石	喉が潤いている新仏に水をあげるため	なし	わからぬ	水臺の脇で火を焚き水臺を焚す	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
6	木ノ内	水棚	新仏	自宅裏の川原が見える庭	竹製の棚	地域の伝説	なし	わからぬ	わからぬ	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
7	西久保	水棚	新仏と餓鬼仏	自宅庭の水道が近くにある空地の上	竹製の棚	餓鬼仏は水に集まるから	なし	水棚の脇で火を焚く	水棚の脇で火を焚く	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
8	東久保	水棚	新仏	川原	竹製の棚	地域の伝説	なし	蓋参り	水棚の脇で火を焚く	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
9	日開野	なし	新仏	川原	竹製の棚	新仏は地獄では暑いところにいるから	あり	わからぬ	水棚の脇で火を焚く	盆の期間中のみ祭壇を作る	多聞寺	筆者調査
10	日開野	水棚	新仏	川原	竹製の棚	地域の伝説	あり	水棚の脇で火を焚く	灯籠流し	盆の期間中のみ祭壇を作る	神宮寺	筆者調査
11	日開野	水棚	新仏	川原	竹製の棚	不明	あり	データなし	データなし	盆の期間中のみ祭壇を作る	不明	小松、1976
12	下喜来	水棚	新仏	川原	竹製の棚	不明	あり	データなし	データなし	盆の期間中のみ祭壇を作る	不明	小松、1976
13	上喜来	迎え台／涼み台	新仏	墓地／自宅庭の溜め池のほとり	竹製の棚	防災上の理由	あり	迎え台(墓地)で火を焚く	涼み台の脇で火を焚く	屋内には祭壇を設けない	多聞寺	筆者調査
14	上喜来	水棚	新仏	庭の排水の近く	竹製の棚	防災上の理由	あり	灯籠立て	灯籠流し	屋内には祭壇を設けない	多聞寺	筆者調査
15	猿飼	水棚	新仏	墓地	竹製の棚	川がない地域なので川では行わない	あり	わからぬ	墓地で火を焚く＋灯籠流し	屋内には祭壇を設けない	神宮寺	筆者調査

① 盆棚の名称

② 祭祀対象

③ 設置場所

④ 盆棚のしつらえ

⑤ 祀り方

⑥ 新仏の去来に関する解釈

⑦ 檀那寺

事例 1 まつぼえ  
松生(3)

① 水墓

② 新仏

③ 吉野川の川原

④ 竹四本を立て、その先端にハナシバ(檜)を挿し、棚の周囲は杉の葉で覆う。棚から地面に竹の梯子を立てかける。

⑤ 八月一日に軒にきらびやかな灯籠を吊し、神宮寺住職に拜んでもらってから火とぼしと言って火をともし。盆の一週間前に墓掃除をし、一三日には床の間に祭壇をこしらえてその上段に新仏の位牌を安置し、その下にいろいろな供物を供える。他の先祖は新仏とは別に仏壇で祀る。

新仏のある家では一三日夕方までに川の中に「水墓」と呼ばれる棚をこしらえる。川岸から四、五mの小道を作り、その先に竹四本で編んだ棚を作る。一四日朝、家族・親戚が水墓に参り、供物を棚に供える。オガラを一〇八本切って束ね、火をつけて道の両側に並べる。これを火とぼしと言う。参拝者は竹の柄杓で川の水をすくって水墓にかけて新仏を弔う。弔いが終わると水墓をすぐに川に流してしまふ。

⑥ 不明

⑦ 神宮寺(真言宗御室派)

事例 2 小野 S・K 家

① 水棚

② 新仏

③ 自宅から二百mほど離れた川原。川で行うのは「流れるものは流れる」という考え方から来ている。

④ 長さ1mほどの新竹(青竹)を四隅に立て、下から約50cmのところを割り竹で棚(台)を作る。棚の前後に竹で梯子を作るが、新仏はこの梯子を上つてあの世に赴くという。水棚にはハナシバ(檜)や菊の花も飾る。

檀那寺から仏画をもらつてきてそれを貼ることもある。ミカンなどの果物をサトイモの葉(半田町の多くの家では、極楽浄土を表す蓮の葉を、手に入りやすく形態も似ているサトイモの葉で代用している)に載せて供物とし、線香をあげる。

⑤ 八月一日、親族や近所の人二〇〜三〇人が集まり、川原で水棚を拜んだ後、オガラ・麦ガラを焚く。新仏の霊は水棚を作る際にやって来て、水棚の脇で火を焚く際に帰る。火は送り火である。供養が済むと水棚はその場で壊す。

お盆の間、家の中に通常の仏壇とは別に、新仏を祀る祭壇を作る。八月一日から三〇日までは、新仏のために、毎晩軒下に吊した灯籠に灯をともし、焚いてもらう。灯籠は三日の「灯籠流し」の日に檀那寺(神宮寺)に持って行って指摘があり、寺で焼く形に変わった。

⑥ 新仏は水棚を立てるときに来て、送り火を焚くときに帰る。

⑦ 神宮寺(真言宗御室派)

事例3 小野<sup>(3)</sup>

①水棚

②新仏

③川原?

④四本の青竹で足を作り、竹で棚を作る。棚には女竹で作った小さな梯子をかけるが、これは仏が上がっていくためと思われる。

⑤半田では新仏のある家は灯籠を一ヵ月ともし水棚を立てる。初盆といいい四日の昼、親族が一人と僧が来てオガラを焚き一同が拝む。これを百八灯と言ひ、仏が見えると言ひ伝えてゐる。その後、一同にお茶と団子、素麺と寿司を出し、親族中の濃い者だけが墓参りに行った。半田の盆棚は一三日に作り一四日にお参りして翌日につぶす。

⑥不明

⑦不明

事例4 田井 Y・T家

①水墓

②新仏

③自宅から歩いてすぐの川原。

川に面したところに水墓を作るのは、昔から仏(死者の霊魂)は川原づたいに戻つてくると考えられてゐるためである。これは三途の川の考え方からきてゐる。

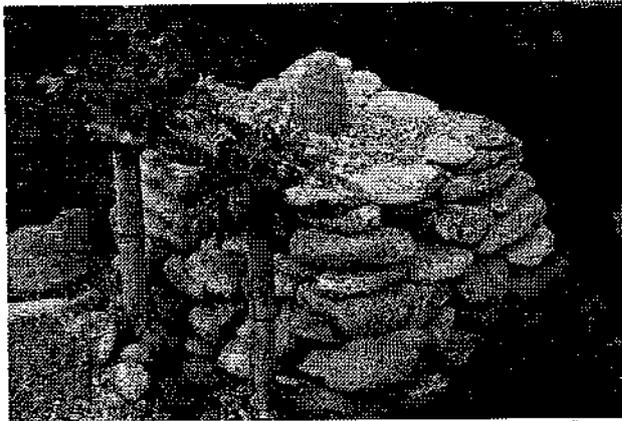


写真1 水墓(田井)

④田井では新仏を供養する際、川原の石を積み重ねて台座(約四〇×七〇×六〇cm)を作り、その上に墓石に見立てた高さ約五〇cmの自然石を載せる習慣がある(写真1)。この設えを「水墓」と呼ぶ。台座の前の左右に竹筒を挿して花瓶とし、ハナシバを挿す。サトイモの葉にナス、キュウリ、カボチャ、ミカン、ナシ、トウモロコシ、イモ、餅、そうめんなどを載せてお供えする。

⑤住職を招き、家の中の祭壇(新仏の位牌を祀る)の前で回向をしてもらつた後、集まつた親族一同で川原に行き、水墓の脇に作った石囲いの中でオガラ・麦ガラを燃やし、水墓を拝む。この火は送り火の意味である。水墓の上の石は「仏の頭」とも呼ばれ、この石を倒すことによつて水墓の供養が終わる。水墓に使つた石は最後、全部川の中に戻す(写真2)。これは石を川に返さないとなつた新仏の霊があつた世に帰れないからである。



写真2 水墓を壊す(田井)

八月一日から三〇日まで、毎晩新仏のために灯籠を灯す。これは三十一日に檀那寺で焼いてもらつたり、舟を作つて川で灯籠流しを行う。

⑥新仏は八月一三日に墓から水墓に来て、その後家の中に作った盆の間だけの祭壇に移り、また水墓に戻り、最後に送り火によつて墓に戻る。祖先の霊は墓から仏壇に移り、最後に墓に帰っていく。

⑦神宮寺(真言宗御室派)

事例5 逢坂 K・H家

①水墓

②新仏

③自宅近くの川原。川で行うのは、喉が渴いている新仏の霊に水をあげるため。

④事例4と同じ形式

⑤事例4と同様、川原の石を積み重ねて台座を作り、その上に墓石に見立てた高さ約五〇cmの自然石を載せる。この設えを「水墓」と呼ぶ。台座の前に竹筒を挿して花瓶とし、ハナシバを挿す。サトイモの葉に季節の野菜や果物を載せて水墓の前に供える。水墓で祀る仏のことを水仏とも呼ぶ。

お盆の間、家の中に通常の仏壇とは別に、新仏を祀る祭壇を臨時に作って祀る。

灯籠は新仏を慰めるもので、八月一日から三〇日まで灯し、三十一日に檀那寺に持っていくき焼いてもらう。灯籠には戒名を書き、皆で寺に行つて霊を送る。

⑥新仏は送り火を焚き、水墓を壊すことによつてあの世へ送られる。

⑦神宮寺（真言宗御室派）

事例6 木ノ内 O・S家

①水棚

②新仏

③自宅裏手の川原が見える庭。水棚は本来川原に設けるものだが、供養に来る人の中に年配者が多いため、足場の悪い川原ではなく、庭で行つてい（写真3）。庭からはすぐ下に川が見える。川原に水棚を設けるのは、地

域の伝統による。

④長さ一三〇

cmほどの竹を

四隅に立て、

下から約六〇

cmのところ

に割り竹を並べ

て棚（台）を

作る。棚には

竹で梯子をつ

ける。水棚に

はサトイモの葉の上にナス（賽の目切り）、団子、ハナシバを載せたものを供える。

⑤家族や親族が集まり、神宮寺の住職を招き、家の中に祀つた新仏の祭壇の前でお経をあげて

拝む（写真4）。その後、庭にし

つらえた水棚の前に行き、その

脇でオガラを焚き、参列者は一人ずつ水棚に柄杓で水をかけて

拝む（写真5）。

一四、五年前まで吉野川で灯籠流しを行つていた。大工や手先の器用な人が舟を作つて、供物を載せ灯籠に灯りをともして八月三十一日



写真3 水棚（木ノ内）



写真4 屋内の祭壇での祭祀（木ノ内）

に流していたが、環境を汚すというので、吉野川に流す習慣はなくなった。

⑥新仏をいつ、どこから迎え、送るかについては意識したことがない。

⑦神宮寺（真言宗御室派）



写真5 水棚に水をかける（木ノ内）

事例7 西久保 I・T家

①水棚

②新仏と餓鬼仏

③自宅庭の、水道が近くにある空池の上。餓鬼仏は水に集まるので、水棚を水の近くに祀る。

④長さ一mほどの比較的太い新竹四本を立て、下から約六〇cmのところを割り竹を並べて棚（台）とする。竹筒の先端にハナシバを挿し、サトイモの葉の上にナスやキュウリ、メロンなど季節の野菜や果物を載せて棚の上に供える（写真6）。棚には竹で作った梯子が付けてある。

⑤八月一日に、家の軒先に灯籠を吊す（写真7）。新仏は外に棚を作って祀る。親族、近所の人々がやってきて、バケツに入れた水を柄杓ですくって

水棚にかけ拜

んだ後、オガ

ラを焚く。こ

れは迎え火の

意味である。

水棚は足で蹴

つて倒し、処

分する。水棚

では新仏も祀

るが、餓鬼仏に水を与えるという施餓鬼の意味の方が強い。

お盆の期間中は、家の中に新仏を祀る祭壇を臨時に作る。

⑥水棚の脇で火を焚いて新仏を迎える。水棚を壊すことで新仏を送る。

⑦神宮寺（真言宗御室派）

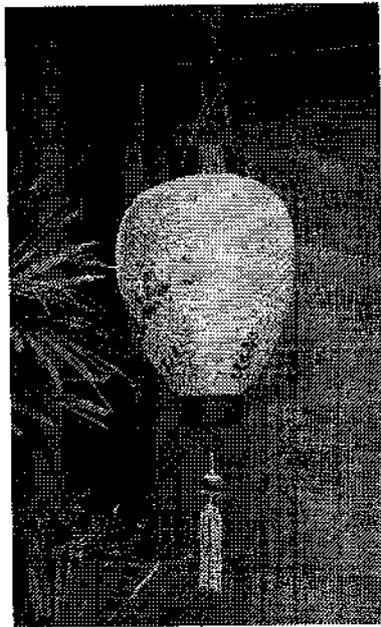


写真7 軒先の灯籠（西久保）

事例8 東久保 H・S家

①水棚

②新仏



写真6 水棚（西久保）

③ 自宅裏の川原。川原に水棚を作るのは、地域の伝統だから。

④ 長さ約1mの竹を四隅に立て、下から約50cmのところに割り竹を並べて棚(台)を作る。棚には竹で作った梯子が付けられている。四隅の竹の先端それぞれハナシバを挿し、棚の上にはサトイモの葉を置き、その上に米、ミカン、細かく刻んだナス、ナスで作った牛、饅頭、砂糖菓子などを供える。

⑤ 親族が集まり、新仏を祀る祭壇(家の中にお盆の間だけ設置)の前で住職が回向をし、そのあと全員が川辺へ移動する。川原で火を焚くが、これは送り火の意味だという。参列者は順次、竹で作った柄杓で川の水を汲み、水棚の竹筒(四隅の竹の先端)に水を入れて拝む。その間、住職は水棚の前で読経を続ける。拝み終わると数人で棚を横倒しにし、供物は川に流す(新仏に食べさせる)。

八月一日から三〇日までの毎晩、新仏のために灯籠を灯す。

⑥ 新仏は七月三二日に墓で迎え、川原で火を焚いて送る。

⑦ 神宮寺(真言宗御室派)

#### 事例9 日開野 M・N家

① 火とぼし(棚それ自体を挿す呼び名はない)

② 新仏

③ 自宅近くの川原。川原で新仏を祀るのは、地獄では暑いところにいるからである。

④ 長さ約1mの竹を四隅に立て、下から約70cmのところに割り竹を並べて棚(台)を作る。棚の上にサトイモの葉を置き、その上に飲み物(ジュース)を載せる。四方の竹の先端にハナシバを挿す。

⑤ 親族が集まり、家の中の新仏を祀る祭壇の前で住職が回向をし、そのあ

と全員が川辺に移動する。棚の横には割り竹を交叉させて作った火とぼしの台が置かれている。この台の上でオガラ・麦ガラを焼く(写真8)。火は送り火の意味がある。拝み終わると火とぼしの台を横倒しにする。仏さんが暑いだろうからと、水を棚の根元にかける。新仏を祀る(家の中の)祭壇は盆の間に壊す。

お盆の灯籠は八月一日に立て、月末に流すか焼く。

⑥ 新仏は火を焚いて送る。

⑦ 多聞寺(真言宗御室派)



写真8 火とぼしの台(日開野)

#### 事例10 日開野 M・H家

① 水棚

② 新仏

③ 自宅近くの川原。昔からの習慣として川原で行ってきた。

④ 長さ約1mの竹を四隅に立て、下から約70cmのところに割り竹を並べ

て棚（台）を作る。棚には竹で作った梯子を掛ける。棚の上にサトイモの葉に載せた供物を供える。

⑤火は一種の迎え火で、それを目当てに仏さんがやってきて、火の光で仏の顔が見えるといわれている。人間の煩惱を表す一〇八束のオガラを作って焼く。新仏は大勢人々が集まってくれているのを見て喜ぶともいう。仏さんが暑いだろうから、火を焚いた後は竹の根元に水をかける。

お盆の期間中は臨時に新仏を祀る祭壇を家の中に作る。

灯籠は盆月に新仏を呼び寄せるために立てる。灯籠の灯りを目当てに霊が帰ってくる。昔は灯籠を三年続けて立てていたが、最近是一年だけになっている。灯籠は八月三十一日に舟に載せて流し、仏と別れる。

⑥火を焚いて新仏を迎え、灯籠流しで送る。

⑦神宮寺（真言宗御室派）

#### 事例11 日開野

①水棚

②新仏

③川原

④青竹四本を立てて棚を作り、四隅の青竹にハナシバを挿す。

⑤八月一三日に水棚をこしらえると、夕方墓地に行つて供え物をし、家に帰ってから水棚にも供物を供える。棚の上にサトイモの葉を敷き、その上に菓子・果物・ナスの輪切り・甘酒を載せる。一四日昼過ぎに親戚の人が集まり、オガラに麦ガラを添えて束ねたものを交叉させた竹の上に載せて燃やす。集まった人は柄杓で棚に水を掛けて拝み、拝み終わるとすぐに棚と竹とを川に流してしまふ。

⑥不明

⑦不明

#### 事例12 下喜来

①水棚

②新仏

③半田川の川原

④青竹四本を立てて棚を作り、四隅の青竹にハナシバを挿す。

⑤一三日には棚を立てるだけで、一四日昼過ぎに家族・親戚が川原に出て棚に参る。まず棚にサトイモの葉を敷き、その上に根が付いたままのサトイモを数本載せて、甘酒・洗米・ナスの輪切り・ブドウなどの果物を一緒に供え、棚の下には線香を立てる。交叉させた竹の上には麦ガラを束ねたものを幾把も載せて、それに火をつける。これが燃え始めると二人ぐらいが手に川水をすくつて「足が焼ける、足が焼ける」といいながら交叉した竹の足下に何度も水をかけてやる。火が燃え尽きると、この竹はすぐに川に流してしまふ。棚の方は、そのうち大水が出れば流れてしまふといつてそのまま放置しておく。柄杓で棚に水をかけることはしない。

⑥不明

⑦不明

#### 事例13 上喜来 N・S家

①涼み台・迎え台の二つ

②新仏

③涼み台は自宅近くのため池のほとり、迎え台は墓地に設ける。上喜来は山間部の集落で、近くに川はない。水の近くに台を設けるのは、火を焚く際の安全のため（防災上の理由）である。

④涼み台(新  
 仏を祀る台。  
 写真9)は  
 長さ約1m  
 の竹を四隅  
 に立てて作  
 った台で、  
 正面に梯子  
 を付ける。



写真9 涼み台 (上喜来)

梯子を付けるのは、棚に新仏  
 が上ってくるからである。涼  
 み台はため池のほとりに設置  
 し、迎え台(火を焚く台。写  
 真10)は墓の前に設置する。  
 涼み台にはその年に穫れた野  
 菜を供え、ハナシバを飾る。  
 昔は水が流れる谷の際で行っ  
 ていた。

⑤迎え台で火を焚いて新仏を  
 迎える。一〇八本の細く切っ  
 た竹を交叉させて作り、その  
 上で一〇八束のオガラを焼く。  
 涼み台は新仏を祀る棚で、や  
 はり脇で火を焚くが、これは送り火である。

盆の期間中、新仏のために特別に家の中に祭壇を設ける習慣はない。



写真10 迎え台 (上喜来)

灯籠は新仏の供養の意味を持っている。戦後間もない頃は三年続けて灯籠を飾っていたが、今は一年しか飾らない。灯籠は吉野川に流しに行く人もいるが、半田町の奥の方の地区では(遠いので)寺で燃やしてもらう。⑥迎え台で火を焚いて新仏を迎え、涼み台の脇で火を焚いて送る。しかし本当に霊が送られるのは三十一日の灯籠流しの日である。

⑦多聞寺(真言宗御室派)

事例14 上喜来 T・T家

①水棚

②新仏

③庭の排水の近くで祀る。上喜来は山間部の集落で、近くに川はない。以前は谷口で行っていた。水の近くで祀るのは、防災上の理由から。

④水棚は新竹で作られ、棚に付ける梯子の段は偶数(四段)とする。新仏は梯子を使って棚の上に入り、皆が供養に来てくれて嬉しいと踊ったり、音頭をとる。水棚の側で火を焚くことを「火とぼし」と言うが、これが迎え火なのか送り火なのかはよくわからない。

⑤オガラは新仏の年齢(没年齢)の数だけ作る。新仏を慰めるための灯籠は八月一日から三十一日まで立てる。昔は三年間灯っていたが、近年は一年だけのところが多くなってきた。先祖を墓から迎えるという意識はないが、火とぼしが終わってからお墓参りには行く。

⑥新仏は八月一日の灯籠立ての日(灯籠に火を入れる)にやって来て、三十一日に灯籠を多聞寺に持って行って焼く日に帰っていく。

⑦多聞寺(真言宗御室派)

事例15 猿飼 N・T家

①水棚（脇で火を焚く棚を火棚と言う）

②新仏

③墓。川がない地域なので川では行わない。

④長さ約1mの竹を四隅に立て、下から約70cmのところを割り竹を並べて棚（台）を作る。ナスの椀を作つて甘酒を供える。

⑤火棚は男なら一〇八本、女なら八八本の竹で作る。男女ともに一〇八本であれば間違いはない。その上にオガラを載せて焼く。

灯籠立て・灯籠流しは、女性はぼんぼり、男は灯籠で行う。

八月一四日に墓地で火を焚くが、これは送り火である。しかしこれは本当に壺を送っているわけではなく、三十一日の夜、灯籠を流すことによつて最終的に壺を送ることになる。

盆の期間中、新仏のために特別に家の中に祭壇を設ける習慣はない。

⑥墓地で送り火を焚いて新仏を送るが、最終的には灯籠流しで送る。

⑦神宮寺（真言宗御室派）

### 三 考察

以上、半田町内の新仏を祀る盆棚の事例を一五例紹介してきた。ここでは、(一)盆棚の形態、(二)盆棚の名称、(三)盆棚の設置場所、(四)盆棚の祭祀対象、(五)新仏の祀り方、(六)新仏の迎え方・送り方に対する解釈、(七)檀那寺との関係の七点から、個々の事例を比較検討してみたい。

#### (一) 盆棚の形態

「二 新仏を祀る盆棚の事例」で紹介したように、半田町ではお盆の時期、新仏を祀る盆棚を屋外に設ける習慣がある。その形態は、

a 竹を組んで棚を作る

b 川原の石を組んで墓状のものをしつらえる

の二つの類型に大別することができる。本稿では、議論の便宜上、現地で一般的な呼称に合わせ、類型aに属する盆棚を「水棚」型盆棚、類型bに属する盆棚を「水墓」型盆棚と呼んでおきたい。

盆棚の形態は全国的に見るとかなり多様であり、高谷重夫はそれを、四隅に笹竹を立てたもの、石で作つたもの、上から吊るもの、一本の柱の上に板または箱の類を載せたものなど、一二のタイプに分類している。「高谷一九九五 六一一五」。それぞれ分布には地域性があるが、全国的にもっとも広く見られるのが四隅に笹竹を立てたものであると言ひ。「高谷一九九五 一六一」。半田町の「水棚」型盆棚もこのタイプに属する。県内でも比較的多く見られるタイプの盆棚である。

半田町内で一般的に見られる盆棚は類型aの「水棚」型盆棚で、その分布は町内全域に及んでいる（事例1、2、3、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15）（図1）。「水棚」型盆棚の構造はおおよそ次のようなものである。長さ一〜二mほどの新竹四本を四隅に立て、先端（竹の筒先）にハナシバ（椀）を挿す。下から五〇〜六〇cmほどのところに割り竹を並べて棚（台）を作る。棚には下から割り竹で作つた梯子を付けるが、これは新仏が梯子を伝つて棚の上にながつてくるためであるという。棚の上にはサトイモの葉を敷き、季節の野菜や果物などの供物を祀る（写真3）。

類型bの「水墓」型盆棚は、川原の石を積み重ねて台座を作り、その上に大きめの自然石を立てて「墓石」に擬したもので（写真2）、半田町内では半田川下流の一部地域（田井、逢坂）に限って見られる（事例4、5）。

この地域では、半田町の他地域に見られるような竹製の「棚」は作られない。このタイプの盆棚は半田町全体から見れば特異な例と言うことができ、半田川の最下流域（吉野川との合流点付近）の小野でも、かつては吉野川の水辺に「水墓」型盆棚を設けて新仏を祀っていた。（現在小野では、事例2、3に見るように「水棚」型盆棚を立てる形に変わっている）。また、半田川最下流域の小野、松生における聞き取り調査によれば、半田町に近い吉野川中流域では、戦前まで川辺に「水墓」型の盆棚の姿を見ることができたという。田井、逢坂の事例は、こうした吉野川中流域の「水墓文化圏」との連続性において議論することが可能であろう。

半田町の中でも、半田川の最下流域から吉野川合流点にかけての地域は川原が広く、積み石に適した大きさ（直径二〇〜四〇cm程度）の平たい石が多く堆積している（写真11）。また、吉野川中流域も同様の条件を有している。こうした自然的条件が、当地で「水墓」という祭祀形態を生み出した背景の一つとなっているものと思われる。なお梅野光興によれば、祖霊や新仏を祀る際、川縁（水際）に墓に見立てた石を立てる習慣は、高知県から徳島県にかけての四国東

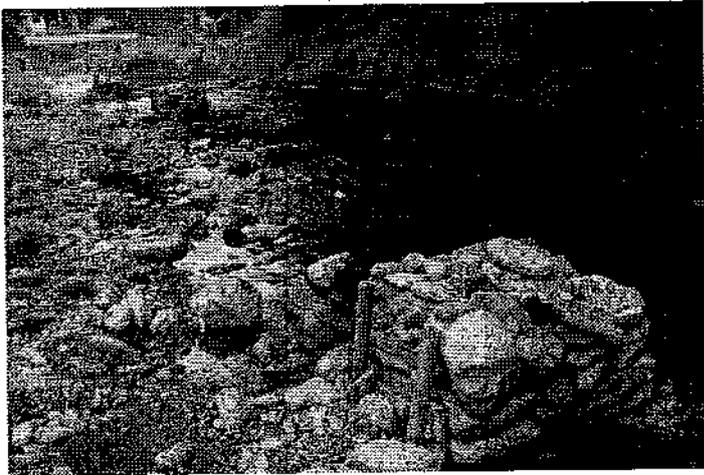


写真11 川原の水墓（田井）

部全域に点在しているという。〔梅野 二〇〇一 一五六〕。「水棚」型、「水墓」型のいずれの形式の盆棚も、新仏の霊を招き、祀る施設という点に変わりはない。それでは両者の違いはどこにあるのだろうか。「水棚」型盆棚はいわば「汎用型」であり、近くに川があるかどうかにかかわらず、どのような環境でも利用することができる形式である。それに対して、川原石を積んで作る「水墓」型盆棚は、特に「川」という環境に適応（特化）した祭祀形式と言うことができる。付近に川のない山間部の集落でかつて「水墓」型の盆棚が作られていたとは考えにくい。

現在、「水墓」型盆棚の分布は限定された地域（田井、逢坂）にとどまっているが、先述のように、かつては半田川の最下流域一帯、吉野川中流域の一部でも「水墓」型の盆棚が作られていた。また、半田川最下流の松生（事例1）では、「水棚」型の盆棚を作りながら、それを「水墓」という名前で呼んでいる。これらのことから、半田川最下流域の盆棚は、もともと「水墓」型であったものが、後に（おそらくは形式の簡略化、あるいは近隣地域の影響などの要因により）「水棚」型へ移行したものと考えられる。少なくとも半田川の最下流域では、「水墓」型盆棚の方が「水棚」型盆棚よりも古い形式を伝えるものと考えられるのである。

半田町では、新仏を祀る際に「火とぼし」（オガラや麦ガラを焼いて火を焚く）をする習慣があるが、火とぼしのための棚（「火棚」と呼ぶところが少なくない。この名称は県内に広く分布している）を竹で組んで特別に設ける地域と、特に設けない（金属製のバケツや一斗缶、川原の石などで代用）地域とがある。この条件を加えると、さらに次のような祭祀施設の類型が設定できる。

a 竹を組んで棚を作る

- a-1 火棚を設ける（事例9、10、11、12、13、14、15）

a-2 火棚を設けない(事例1、2、3、6、7、8)  
b 川原の石を組んで墓状のものをしつらえる

b-1 火棚を設ける

b-2 火棚を設けない(事例4、5)

類型b-1に分類される事例は実際には存在しないため、現在見られる半田町の事例はa-1、a-2、b-2のいずれかの類型に属することになる。

特に「火棚の有無」に注目して事例の分布状況を見てみると(図1)、半田川上流域では火棚を設け、下流域では火棚を設けないというように、分布域が明瞭に分かれていることがわかる。今回の調査では、このような分布の偏差を生み出した要因を確認することはできなかったが、半田町に隣接する吉野川流域の市町村史を見ると、盆棚に付随して火棚を作るという事例が散見される。「三野町誌編集委員会 一九七四 三八九」「三加茂町史編集委員会 一九七三 一四一六」「美馬町史編集委員会 一九八九 一〇七」ことから、以前は半田町全域に火棚を設ける習俗がみられたが、下流域では形式の簡略化が進み、火棚が消滅した(簡略形に変わった)ということも考えられる。

## (二) 盆棚の名称

屋外で新仏を祀る盆棚は、半田川下流の一部地域(松生、田井、逢坂など)を除き、半田町内のほぼ全域で「水棚」と呼ばれている(事例2、3、6、7、8、10、11、12、14、15)。徳島県内でも、先祖・新仏・無縁仏のいずれを祀るかは別として、盆棚を「水棚」と呼ぶ事例は全域に認められる。「庄武 二〇〇三」。全国的にも、盆棚を「水棚」と呼ぶ地域は各地に点

在する「高谷 一九九五 九九」。

それではなぜ、盆棚を「水棚」と称するのだろうか。半田町では、「水の近くに祀る棚だから水棚と呼ぶ」(すなわち水棚の名称はその祭祀場所に由来する)、「水を棚にかけて祀るから水棚と呼ぶ」(すなわち水棚の名称は水をかけるという行為に由来する)という、二通りの解釈が聞かれる。

高谷重夫は、「水棚」という名称は「水向け(水をかける)の儀礼の行われる棚」(半田町における水棚の後者の解釈に相当する)からきたのではないかと推察している。「高谷 一九九五 一〇一」が、筆者も高谷の解釈が「水棚」の持つ性格の本質を突いているものと考ええる。「水棚」という名称の深層にあると考えられるのは、仏教の影響である<sup>(10)</sup>。半田町の事例に限らず、盆棚祭祀の儀礼には随所に仏教の影響を見て取ることができる<sup>(11)</sup>。ここでは、施餓鬼の水供儀礼、流れ灌頂、葬式や年忌法要の儀礼の中などに典型的に見られるような仏教の「水による靈魂の浄化」という考え方<sup>(12)</sup>。「梅野 二〇〇一 一六三」が「水棚」という名称に反映している可能性(すなわち、水の靈力で靈魂を浄める場が水棚であるという考え方)「場所としての水」ではなく「手段としての水」に重点を置くことらえ方を指摘しておきたい。全国的に見ると、水(川や海)の近くに設けられていないにもかかわらず、盆棚を「水棚」と呼ぶ地域が少なくないことも、この解釈の妥当性を裏付ける証左となる。「文化庁 一九六九 二八三〜四一〇」。

なお半田町では、「川(水)の近くに祀る棚だから水棚と呼ぶ」という解釈も広く聞かれ、こうした理解が盆棚祭祀のあり方(特に盆棚の名称や祭祀場所など)を規定している面もある。

半田町の集落は、ほぼ半田川の本流・支流に沿って展開しているが、上流域(山間部)に至ると、川から離れたところに集落が立地しているケ-

スも見られる。こうした地域でも、多くの場合「水棚」という名称が通用しているが、固有の名称が失われた例(事例9)や、独特の呼び名が用いられている例(事例12)もある。川から距離がある地域では、川で新仏の祭祀を行うことが物理的に困難なケースが少なくない。こうした状況では新仏を祀る盆棚と川(水)を関連づける意識が薄れ、一連の行事の中に埋没して(水棚という)固有の名称を失ったり(事例9)、その名称が当地の状況に合わせて適宜設定されたりする(事例12)のようなケースが出てくるものと考えられる。

(一)で述べたように、半田川下流の一部地域(田井、逢坂)では、川原の石を積んで墓状の設備を作り、新仏の霊を祀っている。現地ではこれを「水墓」と呼んでいる(事例4、5)。これはその形態に由来する名称と考えられる。

「水棚」型の盆棚を作りながら、それを「水棚」と呼ばず「水墓」と呼ぶ地域が半田川下流の吉野川との合流点付近に存在する(事例1)。地域的には「水墓」型盆棚を作りこれを「水墓」と呼ぶ地域(田井、逢坂)と隣接しており、盆棚の呼称という点から見ると、半田川最下流の「水墓」呼称圏、それより上流の「水棚」呼称圏というようにおおよそ二分して理解することができそうである。「水棚」型盆棚を作りながら「水墓」と呼ぶという名称のねじれの問題については、(一)で述べたように、かつては「水墓」型盆棚を作っていたものが(おそらくは簡略化、あるいは他地域の習俗の影響で)「水棚」型に変わったものの、呼称は古い「水墓」がそのまま使用され続けたことよって起こった現象と考えられる<sup>(12)</sup>。

### (三) 盆棚の設置場所

半田町では現在、先祖の霊は家の中の仏壇(常設)、新仏は屋外に設けた盆棚(お盆の間だけの仮設)というように、両者を別の空間で祀る習慣が見られる。わが国において、お盆に来る霊には先祖・新仏・無縁仏(餓鬼)の三種があるとされているが「柳田 一九六二 七一」、今回の調査で確認できた範囲では、半田町でお盆に特に意識されて祀られているのは先祖と新仏の霊であり、無縁仏の影は薄い(考えられる理由は(四)で後述)。

かつては庭先に簡単な盆棚(これも「水棚」と呼ぶ。丸竹の片端を傘の骨を逆にしたように割り、編んで棚にする。サトイモの葉を載せ、ナス・イモ・米・団子などを載せて祀る。この前で火を焚き水棚に水をかけて拝む)を作り、火を焚いて無縁仏を供養する習慣も見られたというが「半田町誌出版委員会 一九八一 一〇三六」が、手間がかかることもあり、現在はこうした風はほとんど見られなくなっている。

以上のことから、かつて半田町では、

①先祖 ウチ(屋内) 仏壇(常設)

②無縁仏 ソト(庭) 盆棚(仮設)

③新仏 ソト(川辺、水辺) 盆棚(仮設)

という形でそれぞれの霊の祭祀が行われていたが、このうち②が消滅しつつあることがわかる。

先祖は屋内、新仏と無縁仏は屋外という形でその祭祀空間を隔離するのは、

①先祖 Ⅱ清浄・安定した靈魂Ⅱ「家」にとって内部的存在

②新仏・無縁仏Ⅱ不浄・不安定な靈魂Ⅱ「家」にとって外部的存在

という靈魂観(認識)が前提となっているものと考えられる「柳田 一九六二 九三」。その上で、新仏と無縁仏を、庭と川辺(水辺)というようにさらに空間的に「祀り分けている」ことが注目される。

半田町では、新仏を祀る盆棚は川（水）辺に作るもの、という意識が強く見られる。家の近くに谷川が流れている場合には、必ず川辺に盆棚を設けている（事例1、2、3、4、5、8、9、10、11、12）。少し川から離れた環境にあっても、「新仏はできるだけ川（水）に近いところで祀るものである」という意識は残っている。たとえば「自宅庭の川が見えるところ」（事例6）、「自宅庭の、水道が近くにある空池の上」（事例7）、「自宅庭の溜め池のほとり」（事例13）、「庭の排水の近く」（事例14）といった具合である。

それではなぜ、半田町では新仏を祀る盆棚を特に川（水）辺に設けるのだろうか。「喉が渴いている新仏の霊に水をあげるため」（事例5）、「新仏は地獄で暑いところにいるから」（事例9）といった仏教的解釈、防災上の理由（事例13、14）といったプラクティカルな解釈も見られるが、これらは本来の意味が失われた後に付会された解釈と考えられる。ここで注目されるのは、「仏（死者の靈魂）は川原づたいに戻つてくると考えられているため」（事例4）という回答である。川（水）を祖霊の通路と考えるこのような解釈こそ、半田町において盆棚が川（水）辺に設けられる理由を読み解く鍵と言えるだろう。

梅野光興は、高知県・徳島県においては川で祖霊を祀る事例が広く見られることを指摘し、特に祖霊と川（水）が結びつけられる背景として、次の四点を挙げている「梅野 二〇〇一 一六八」。

- ①石塔以前の祖霊祭祀の姿である可能性、
- ②水神祭祀との関係、
- ③葬送習俗の中で霊を川や谷に送る習俗<sup>(14)</sup>、
- ④霊に水をかけて浄める仏教的な考え方。

梅野が論じているのは祖霊一般と川（水）の結びつきであり、特に新仏と川（水）の結びつきだけを取り上げて議論しているわけではない。半田町では一般の祖霊は川（水辺）で祀られることはない。あくまで新仏のみ

が川（水）と結びつけられる。それでは、半田町において、盆に来る霊のうち特に新仏のみが川（水）と結びつけられるのはなぜだろうか。もっとも説得力のあるのは、

①まだ死んで間もない新仏の霊は「死の穢れ」を有し「柳田 一九六二 九三」、危険で不安定な「荒忌の霊<sup>(15)</sup>」と考えられている「柳田 一九六二 六六〇六七」。「最上 一九八八 一〇一」。そのためその祭場を日常生活空間から隔離された場所に設定しようという発想が生じる。

②絶えず流れる川の清浄な流れと、仏教的な「水による穢れの浄化」。「梅野 二〇〇一 一六三」という考え方の結びつき。

③川はこの世とあの世の境界であり（したがって川は神・祖霊などの立ち現れる場所ともなる）、あの世の存在である神・祖霊などの祭祀場所として適切であるという認識<sup>(16)</sup>。

などが重なり、特に新仏と水（川）とが強く結びつけられるに至ったという解釈であろう。①は新仏の霊が日常生活空間とは離れた場所に隔離されて祀られる要因、②と③は新仏の霊が特に「川（水）」という環境と結びつけられる要因である。

柳田國男の論に基づく①のような解釈に対しては、高谷重夫や喜多村理子による批判がある「高谷 一九八五」「喜多村 一九八五」。高谷および喜多村は、盆棚の祭祀地点と祀られる霊の種別（先祖・新仏・無縁仏）を全国的に比較検討する中で、かつては先祖・新仏・無縁仏はすべて同様に屋外で区別なく祀られていたが、仏壇と位牌が屋内で祀られるようになる」と先祖の祭祀場所が屋内に移り<sup>(17)</sup>、その結果、新仏と無縁仏の霊の祭場が屋外に残ることになったのではないかと論じている「高谷 一九八五 一四一」「喜多村 一九八五 一四一」。つまり、新仏や無縁仏が先祖と別の地点（屋外）に祀られるのは、「目的」ではなく「結果」だといっているのであ

る。

しかし高谷や喜多村は、なぜ死者の霊が屋外で祀られていたのか、またなぜ先祖以外の霊は（先祖が屋内に取り込まれた後も）屋外で祀られ続けたのかという問いについては答えていない。筆者はそこには「死者の霊」に対する畏怖の感情があったものと考ええる。死の穢れを有し、危険で不安定な霊のうち、先祖だけを「清まはった霊」〔柳田 一九六二 九三〕として屋内に取り入れるということは、とりもなおさず、残された新仏や無縁仏を「危険なもの」として弁別し、外部に排除（隔離）することを意味している。したがって、ここでは結局、柳田に基づく①の解釈が適合することになるのである。

猿飼（事例14）では新仏を祀る棚を墓に設けているが、これは猿飼の地理的環境と関連があるものと考えられる。猿飼では近くに川が流れていないため（川筋まで2kmあまりの距離がある）、川（水）と新仏の霊を結びつける意識が薄くなり、一般の祖霊と同様に、新仏の霊は墓と強く関連づけられるようになったものと思われる。

半田川上流（山間部）の上喜来（事例12）では、新仏を祀る設えとして「迎え台」（他地域で言うところの火棚に相当する）と「涼み台」（他地域で言うところの水棚に相当する）の二つを作り、迎え台を墓地、涼み台を自宅庭の溜め池のほとりに据えている。ここでは、まず墓（迎え台）で火を焚いて新仏の霊を迎え、それを自宅庭の溜め池のほとり（涼み台）に移し、そこで霊に涼んでもらいながら新仏の霊を祀るという構造が見て取れる。現在、半田町では、火棚（火とぼしを行う場所）と水棚を同一の地点に設置するのが一般的な形となっている。この事例のように火棚と水棚を分離する形が半田町におけるより古い時代の新仏祭祀のあり方を伝えるものかどうかは即断できない（たとえば霊は水辺で迎え、水辺で送ると考え

る地域では、火棚と水棚は近接していて当然である）。しかし少なくとも、墓↓盆棚（水棚）という新仏の靈魂の移動経路を明確に確認できる例として、興味深い事例と言うことができる。

#### （四）盆棚の祭祀対象

かつて半田町では、お盆の際、新仏と無縁仏のそれぞれに対し盆棚を設けて祀っていた。新仏を祀る盆棚は川（水）辺（山間部の川が近くにならない地区では墓として）とあるところもある）、無縁仏を祀る盆棚は自宅庭というように設置場所を分けていたのみならず、盆棚の形式も異なっていた〔半田町誌出版委員会 一九八一—一〇三六〕。しかし現在では無縁仏を祀る盆棚を特別に作る習俗は消滅しつつあり、お盆に無縁仏を祀るという意識も次第に薄れてきている。一方、川（水）辺に盆棚（水棚）を設けて新仏の霊を祀る習俗は、（減少傾向にはあるものの）依然として町内の多くの地域で受け継がれている。

川（水）辺の盆棚（水棚）での祭祀対象は事例7（西久保）のみ「新仏」と「餓鬼仏」となっており、それ以外の事例（一四例）ではすべて「新仏」のみを祀るとしている。

半田町内の盆棚の祭祀に関わっている神宮寺および多聞寺の住職によれば、「水棚は本来新仏のみならず、祀り手のない無縁仏も一緒に供養するものである」という（傍点筆者）。無縁仏の話に限らず、定期的な祭祀のたびに繰り返されるこうした仏教（僧侶）側の「知識人」としての言説・解釈が、次第に「常識」として民間に浸透・定着していくものと考えられる。

しかし半田町では、かつては無縁仏と新仏を分けて祀る習慣があったこともあり、川（水）辺の盆棚と新仏を結びつける意識は非常に強い。その

ためこうした仏教側の（水棚では新仏と無縁仏をあわせ祀るものであるという）解釈が民間に深く浸透するには至っていないものと思われる。

今回の現地調査、および文献研究の範囲では、半田町において屋外の盆棚で先祖を祀るという事例は見られなかった。（三）でも述べたが、かつては先祖も新仏ともに屋外で祀られていたという高谷重夫・喜多村理子の説「高谷 一九八五」「喜多村 一九八五」が半田町の事例にも当てはまるかどうかについては、今後さらに調査を進めていく中で検討したいと考えている。

#### （五）新仏の祀り方

半田町において、お盆に新仏を祀る一連の行事は、

a 八月一日に新仏を供養するための灯籠を家の軒先に立て、八月末に川に流す（または檀那寺に持って行って焼く）。

b 家の中に設けられた新仏のための祭壇（新仏の位牌を安置）の前で祭祀を行う。

c 屋外（多くの場合川原）に設けられた盆棚の前で祭祀を行う。

という三つの構成要素からなっている。各儀礼の中心となる象徴は、それぞれ、灯籠、新仏の位牌、盆棚である。

なお、「墓に行く」という要素は、新仏を祀る一連の儀礼過程において必須の要素ではない（事例8、13に「墓で新仏を迎える」という形で見られるのみ）。

これらの構成要素は、時間的には、

① 灯籠立て 八月一日

② 屋内（祭壇）での新仏祭祀 八月中旬～下旬（多くは二三日）

③ 屋外（盆棚）での新仏祭祀 八月中旬（多くは一四日）

盆棚の設置↓火とぼし↓盆棚に水をかけ拝礼する↓盆棚を壊す

④ 灯籠流し 八月三一日

といった流れで進行する。

このうち、屋内に臨時の祭壇を設け新仏の位牌を祀り、その靈魂を供養することが一般化したのはそれほど古いことではなく、「（新仏の靈を）屋外で祀るだけではなく、（先祖と同様に）屋内でも祀ってほしい」という檀家側の要請があり、それを受けて次第に広がっていった習慣のようである。

新仏は、先祖とは異なった存在（不安定で危険な靈）と考えられ、その祭場（盆棚）は屋外に隔離されてきた。しかし、近代に現代にかけて、新仏を畏怖すべきものとして聖別する観念は次第に薄れていき、その一方で新仏も先祖と同様に（家の中で）丁重に祀るべきであるという考え方が徐々に強くなり、伝統的な新仏祭祀（屋外に盆棚を設けて祀る）の習俗を残しながらも、先祖と同様に家の中に祭壇を設けてその靈魂を祀るという習俗が生まれたものと考えられる。結果として半田町では、新仏はソト（盆棚）とウチ（家の中の祭壇）で同時に祀られることになったのである。

半田町でも近年、手間がかかるという理由で、新仏を祀る盆棚を作る習慣は次第に衰退しつつある。この趨勢がさらに進むと、屋外での盆棚祭祀が消滅し、新仏も先祖と同様に同じ屋内で祀られるという段階（ただし祭壇は別）に至り、さらに将来的には、新仏単独の祭壇も消滅し、一つの仏壇に吸収されることも予想される。これは「外部（新仏）の内部（先祖）化」とでも言うべきプロセスが確実に進行していることを意味している。

以上のことから、半田町におけるお盆の新仏祭祀の儀礼は、かつては① 灯籠立て↓③ 屋外（盆棚）での祭祀↓④ 灯籠流しという流れで行われていたが、後に② 屋内（祭壇）での祭祀が加わって①↓②↓③↓④という流れ

になり、現在はさらに①↓②↓④という流れに変容しつづけると言える。山間部の上喜来、猿飼など（周辺地域）では、屋内に新仏を祀る祭壇を設けることはなく、現在も①↓③↓④という古い新仏祭祀の形が残っている。

なお、半田町では新仏を祀る習俗として、「仏正月」という行事が今も伝承されている（ウ）。「半田町誌出版委員会 一九八一—一〇一六—一〇一八」。これは師走最初の辰巳（山分では巳午）の日に行う、新仏に対する正月行事で、新仏の墓を掃除して注連門松を飾った後、仏（新仏の霊）を背負って家に帰り、鏡餅を供えて祀るといふものである。半田町において、新仏に対する正月行事（仏正月）と盆行事（水棚の祭祀）がセットで伝承されてきたことは注目に値する。こうした儀礼の存在は、新仏に対する意識を鋭敏にし、新仏の祭祀が持続する原動力ともなってきたと考えられる。

#### （六）新仏の迎え方・送り方に対する解釈

（五）で整理した新仏祭祀の流れ自体は、半田町内のどの事例にもほぼ共通してあてはまるものであるが、ここで注目すべきは、どの儀礼が「新仏を迎える儀礼」で、どの儀礼が「新仏を送る儀礼」であるかということについては、インフォーマントによってかなり認識の違いがあるということである。これは、「新仏を迎える儀礼」「新仏を送る儀礼」と解釈することが可能な儀礼が、一連の新仏祭祀の儀礼過程の中にそれぞれ複数存在するという点に起因している。

半田町では、一連の祭祀儀礼（五）で述べた①↓④を定められた手順で執行することにより、新仏の供養（さらには祖霊への昇華）が達成されると考えられており（すなわち祭祀儀礼全体が一つのセットとして捉えられており）、個々の儀礼が持つ具体的な意味については、あまり深く認識さ

れていないか、かなり自由な解釈が行われている。人々にとって重要なことは、一連の手続きに従って新仏を「祀る」ことにあり、具体的にはどの儀礼によって新仏を迎え、送るかということは大きな関心事ではないのである。

実際に、現地で「新仏はいつどこでどのように迎え（送り）ますか」と尋ねてみると、「あまり考えたこともない」という答えを含め、さまざまな答えが返ってくる（表1）。

半田町では、どの儀礼をもって新仏を「迎える」儀礼と捉えているかという点、

A 灯籠立て（事例14）

B 水棚（水墓）を立てる（事例2、3、4）

C 火を焚く

C-1 墓地で火を焚く（事例13）

C-2 盆棚の脇（川原）で火を焚く（事例7、10）

D 墓参り（事例8）

E わからない（事例5、6、9、15）

F 回答なし（この件について尋ねていない）（事例1、3、11、12）

といったバリエーションがある。新仏を迎える場所という点から見ると、墓地、家（灯籠）、盆棚（多くは川（水）の近く）という三つの異なった解釈があることがわかる。

一方、新仏を「送る」儀礼として捉えられているのは、

a 灯籠流し（事例10、14）

b 水棚（水墓）を壊す（事例5、7）

c 盆棚の脇（川原）で火を焚く（事例2、4、8、9、13）

d 火を焚く+灯籠流し（事例15）

e わからない(事例6)

f 回答なし(この件について尋ねていない)(事例1、3、11、12)

となつてゐる。新仏を送る儀礼はいずれも川(水辺)で行われており、現在の事例から見ると限りでは、半田町では一般に、新仏は川を経てあの世に帰ると考えられてゐるとみてよからう。

次に新仏を「迎える」儀礼と「送る」儀礼の対応関係を見てみよう。

八月一日の「灯籠立て」と八月三日の「灯籠流し」は対をなす儀礼であり、灯籠を新仏の依代と考えれば、そこには霊を「迎える—送る」という構造が明瞭に見て取れる。実際、「灯籠立て—灯籠流し」儀礼を新仏を迎える／送る儀礼と捉えている事例もある(事例14)。しかし、「灯籠立て—灯籠流し」を新仏を迎え、送る儀礼と解釈すると、新仏祭祀の中心的な位置を占める盆棚にまつわる儀礼—盆棚を作り、火を焚き(火とぼし)、水をかけて祀り、最後に倒す儀礼—をどう意味づけるかが問題になる。

特に、「火とぼし」儀礼を新仏の祭祀儀礼全体の中のように位置づけるかは重要な問題である。一般の祖霊(先祖)に対する祭祀との関係で、「火とぼし」を「迎え火」または「送り火」と解釈するのはごく自然な流れのように思える。しかし「火とぼし」儀礼を新仏の「送り火」と解釈すると、月末の「灯籠流し」の意味づけがうまくいかなくなる。一度送った新仏をもう一度送ることになってしまうからである。こうした矛盾を回避するもつとも適当な方法は、「灯籠立て—灯籠流し」儀礼を新仏を「迎える—送る」といった枠組とは別の次元の枠組Ⅱ具体的には新仏を「祀る」という枠組で解釈することである(18)。「灯籠は新仏の供養のために立てられる」と考へれば、「火とぼし」儀礼を「送り火」と考えても大きな齟齬は起こらない。矛盾を回避するもう一つの方法は(かなり苦しい解釈ではあるが)、「火とぼし」儀礼は送り火であるが、本当は月末の「灯籠流し」によって送られ

ると解釈することである。ここでは、「火とぼし」「灯籠流し」という二つの段階を経て新仏は完全に送られると捉えられている。

先に述べたように、新仏祭祀の儀礼全体は(一連の儀礼からなる)一つの「儀礼セット」と捉えられている。したがって、個々の儀礼の意味について深く考える必要もなく、「昔から行われてきたように」このセットを手順通り遂行するだけで「新仏の供養」という目的は達せられる。こうした状況においては、個々の儀礼の本来の意味づけは忘却されるか、次第に曖昧になっていく。結局、個人個人が一連の新仏祭祀の流れに構造的・一貫性・整合性を持たせる(辻褄を合わせる)形で、新仏を「迎える」「送る」儀礼を措定していると言える。

それでは、半田町では、本来どの儀礼によって新仏を迎え／送ると考えられていたのか。(五)で整理したように、半田町におけるお盆の新仏祭祀の行事は、

a 軒先の灯籠による祭祀

b 屋内(祭壇)での祭祀

c 屋外(盆棚)での祭祀

の三つの要素から構成されている。それぞれの行事は、

a 灯籠立て(八月一日)—灯籠に灯をともし(八月中の毎日)—灯籠流し(八月三日)

b 祭壇を設ける(八月上旬)—祭壇の祭祀(八月一四日)—祭壇を片づける(八月中旬—下旬)

c 盆棚を作る(八月一三日)—盆棚の祭祀(八月一四日)—盆棚を壊す(八月一四日)

というように、いずれの儀礼も、始まりの儀礼—祭祀儀礼—終わりの儀礼という三段階からなっていることがわかる。また時間的にみると、a、b、

cの儀礼は入れ子構造（一番外枠がa、その内側がb、一番内側がc）となつている。

入れ子の一番外側を形成している「灯籠立て―灯籠流し」儀礼は、県内各地の盆行事の諸事例「文化庁 一九六九 二八三―四一〇」「徳島民俗学会 一九八五」をふまえて考えると、新仏を「迎える―送る」というよりも「盆月のあいだ新仏を慰める（祀る）」ことにその主意があるものと考えられる。

屋内の祭壇での祭祀儀礼は、一般に八月一四日、屋外で盆棚の祭祀を行う前に行われる。ただし家の中に祭壇を設ける日、片づける日は家によって一定していない。また、祭壇を設けたり、片づけたりする行為が、新仏の霊を迎える、送る儀礼ととらえられている事例はない。（五）で述べたように、家の中で新仏の霊を祀るという形は本来の新仏祭祀の構造には含まれず、後に付け加わつた要素と考えられ、新仏を「迎える―送る」という枠組とは離れた儀礼と考えるのが適切であろう。

以上のことから、実際に新仏の霊を迎え、送る儀礼は、入れ子構造の一番内側（新仏を祀る一連の儀礼のコアの部分）にあるcの「盆棚（水棚）」を中心として展開する儀礼の中に求められるべきであろう。

半田町では八月一三日に盆棚を作り、翌一四日に盆棚の祭祀を行っている場合が多い（<sup>19</sup>）。盆棚の祭祀は、一般に、①火とぼし、②盆棚に水をかけて拝む、③盆棚を倒して川に流すといった段階からなる。

儀礼の全体的な構造から考えると、一三日に盆棚を立てることによって川（または墓）から新仏の霊を迎え、一連の祭祀（火とぼし、水かけ）が終わった後、盆棚を倒して川に流すことによって霊を送る、とみるのが妥当であろう。盆棚を破壊するという行為は、祭祀が完全に終了し、祭祀対象である新仏の霊がその場を立ち去つたことを意味し、盆棚を川に流すと

いう行為は、新仏の霊が川を経て送られるという考え方を反映しているものと思われる。

#### （七）檀那寺との関係

半田町内には神宮寺（上の原、真言宗御室寺派、本尊薬師如来）と多聞寺（上喜来、真言宗御室寺派、本尊毘沙門天）の二つの寺院がある。神宮寺の檀家は半田川下流域を中心とした約一二〇〇戸、多聞寺の檀家は上流域を中心とした約五〇〇戸である。「半田町誌出版委員会 一九八一 七二七、七三三」。

半田町における盆棚の祭祀儀礼やその解釈には、仏教の影響を随所に見ることが出来る（たとえば、一〇八束のオガラを焚く習慣、「新仏は地獄の暑いところにいる」「餓鬼は水に集まる」といった解釈など）。こうした影響は、僧侶が（家の中の祭壇の祭祀とともに）盆棚の祭祀儀礼を主事していることによるところが大きい。僧侶の発言や行動、解釈が盆棚祭祀の形態や意味づけに大きく関わってくるとすれば、「檀那寺の違い」という要素が、盆棚祭祀のあり方を規定する一つの要因となつてもおかしくはない。

しかし今回の調査では、明らかに檀那寺の違いによると思われる新仏祭祀のあり方の相違は確認することができなかった（事例間に差異があったとしても、それは地理的環境など、他の要因によって説明されるべきものであった）。神宮寺も多聞寺も同じ宗派（真言宗御室寺派）の寺院であり、祭祀儀礼や儀礼の解釈にしても、それほど大きな差異を生み出すことはなかったものと思われる。

#### 四 おわりに

ここまで、半田町における新仏を祀る盆棚の祭祀の実態を紹介するとともに、その祭祀のあり方を規定する要因について検討を重ねてきた。詳細な分析はすでに「三 考察」で行ったが、最後に本研究で得られた主たる知見を整理しておきたい。

①半田町では盆に来る三種の霊（先祖・新仏・無縁仏）のうち特に新仏を（先祖との対比のもとに）クローズアップし、屋外に盆棚を設けて祀る習慣がある。その背景として、死穢を有し不安定な新仏の霊に対する畏怖の念があるものと考えられる。

②半田町では、半田川とその支流に沿って多くの集落が展開している。こうした「川」という自然環境が、半田町における盆棚祭祀のありかたに大きな影響を与えている。半田町の中でも、近くに川のある地域とない地域では、盆棚祭祀のあり方に差異が見られる。川に近い地域では、川を祖霊（新仏）の通路とみなす考え方が強く見られ、水による穢れの浄化といった観念と相まって、川辺（水辺）で新仏の祭祀が行われる。盆棚の名称も、「水棚」「水墓」など「水」を強く意識したものとなっている。しかし川から離れた地域では、川（水）を新仏の通路と見なす考え方が薄れ（一部では依然として水辺で祀るという意識は残っているものの）、墓に盆棚を設けたり、「水棚」という本来の名称が失われた地域もある。

③盆棚の形態から見ると、半田町の盆棚は、半田川最下流域から吉野川合流点にかけての「水墓」型盆棚圏、半田川下流域と上流域の「水棚」型盆棚圏に分けることができる。当地の自然的環境（川への近接性、川原の広さ、適当な大きさの川原石の得やすさ）が盆棚の形態を規定している。

④半田町では現在、灯籠立て↓屋内の祭壇での祭祀↓屋外での盆棚での

祭祀↓灯籠流しといった流れで新仏の祭祀が行われているが、屋内の祭壇での祭祀は、新仏に対する穢れ観の薄れから、後に付け加わった要素と考えられる。

⑤半田町では、新仏の送り方・迎え方について多様な解釈（混乱と言ってもよい）がみられるが、これは、当地では新仏を「祀る」行為に重点が置かれてきたため、新仏を「迎え」「送る」行為に関する意識が薄れていること、当地の新仏祭祀に関わる儀礼が重層的構造を有していることに起因している。なお本来は、盆棚を作るときに新仏の霊を迎え、盆棚を壊すときに新仏の霊を送るのが原型であったものと思われる。

⑥半田町における盆棚の祭祀方法や儀礼の解釈の中には、随所に仏教の影響が見られる。しかし檀那寺による盆棚祭祀のあり方の違いは見いだせない。

調査事例の不足から、本稿では仮説の提示にとどまり、検証に至らなかった問題も多い。また本稿では半田町の新仏祭祀のあり方に焦点を当てたため、先祖・無縁仏の祭祀のあり方と、新仏祭祀との関係については十分に検討することができなかった。今後は新仏祭祀に加え、当地の先祖・無縁仏の祭祀に関する事例を収集することに努めるとともに、当地の宗教的世界観や他の信仰伝承との関係も考慮しつつ、半田町という一地域における祖霊祭祀の構造と変容過程を再構成し、それを祖霊祭祀に関する一般的なモデルとつきあわせながら検討する作業を進めていきたい。

#### 注

- (1) 「柳田 一九六二」「小松 一九七六」「最上 一九八四」「伊藤 一九八四」「喜多村 一九八五」「高谷 一九八五」「喜多村 一九九八」

「庄武 二〇〇三」など。

(2) 「小松 一九七六 一九〇二〇」。

(3) 「笠井 一九五七 一四〇」。

(4) 「小松 一九七六 二二」。

(5) 「小松 一九七六 二二」。

(6) 高谷重夫は、近畿地方の宮座の祭りの際に頭屋のカドに設けられる祭壇、庚申講の六〇年に一度の大祭の際に作られる祭壇、福島県白河市の天道念仏の棚などの例を挙げ、竹の四本柱の仮屋が古くより伝承された祭壇の形で、盆棚もその一つであったと論じている。「高谷 一九九五 一七」。

(7) 梯子が盆棚に不可欠の施設とする風は全国的に見られる。「高谷 一九九五 一六」。

(8) 「また他に水棚を作らず吉野川の水辺でお祭りする家もあった。これは美見しなかったが水辺の石を寄せ集め其上に石を立てて墓に模擬し、花立にシキブを挿して供えオガラをたき、親族一同が拝み、終れば潰してしまふと云う」(半田町小野、前田周平からの聞き取り)。「笠井 一九五七 一四〇」。筆者の聞き取り調査(小野・三反田啓介氏、二〇〇二年八月一四日)でも、小野をはじめとする半田川最下流域では、かつては吉野川に石組みの盆棚を設けていたとの回答を得た。

(9) 梅野は高知県中土佐町・土佐清水市・北川村・東洋町、徳島県海部町・相生町・半田町の事例を挙げている。

(10) 高谷重夫が指摘するように、こうした水向け儀礼には、民間の献供習俗として伝承されてきたという面もあるものと思われる。「高谷 一九九五 一八〇」。

(11) たとえば僧侶の新仏祭祀への関与、仏教的な儀礼行為(棚に水を掛

けて浄める行為など)の存在、儀礼行為の仏教的解釈など。

(12) 半田川最下流域では、一部「水棚」「水墓」の両方の呼称が混在している地域がある。これは「水墓」型盆棚から「水棚」型盆棚への移行にともなつての混乱と考えられる。

(13) 徳島県西部の祖谷地方や穴吹町などでは、葬送儀礼の際に「カリヤ」「ムイカダナ」などと呼ばれる臨時の施設を作り、蓑笠を吊す習慣が見られるが、その形態は新仏を祀る盆棚とよく似ているという。「武田 一九五五 一〇一」「近藤 一九八二 一三四」。このことから、庄憲子は、盆に祀る新仏についても葬式直後の死者に対しての感情と同様のもの(死穢への恐怖を抱いていたものではないかと推察している)。「庄武 二〇〇三」。

(14) 川辺での水神祭祀、虫送りの際川に虫を送る習俗、七夕の笹竹を川に流す習俗などは、みなこうした世界観を背景として成立した民俗行事と思われる。

(15) 半田町において、高谷や喜多村がいうような霊の祭祀場所の変化があったかどうか(たとえば、新仏のみならず先祖もかつては川辺で祀っていたかどうか)については、今回の調査では確認することができなかった。

(16) 新仏のある家では八月一日(昭和三〇年代までは旧暦七月一日)に家の軒下に灯籠(あるいは岐阜提灯)を吊して毎晩灯をともし、八月末日(かつては七月晦日)の灯籠流しの際に小舟に載せて川に流すという習俗は、美馬郡・三好郡の吉野川流域一帯に広く分布している。「三加茂町史編集委員会 一九七三 一四一七」「笠井 一九五七 一四〇」「一四一」「三野町誌編集委員会 一九七四 三八九」「三好町史編集委員会 一九九六 六九七」。

(17) 仏正月は、徳島県三好郡・美馬郡、愛媛県宇摩郡付近に限り伝承されて  
いる習俗であるという「半田町誌出版委員会 一九八一 一〇一  
七」。

(18) 逆に、「灯籠立て—灯籠流し」儀礼を新仏を「迎え」「送る」儀礼、  
盆棚を作り、脇で火を焚き、水をかけ、壊す儀礼を新仏を「祀る」儀  
礼と位置づけても矛盾は起こらない。

(19) 近年、新仏を祀る盆棚の祭祀は、祭祀を主宰する家や僧侶の都合に  
より必ずしも一四日に行われなくなっている。二〇〇二年に筆者が行  
った調査では、日程は八月八日—一六日までの幅があった。

### 参考文献

伊藤唯真 一九八四 『仏教と民俗宗教—日本仏教民俗論』 国書刊行会  
梅野光興 二〇〇一 「祖霊は水辺に集う—高知県の盆行事から」 『国  
立歴史民俗博物館研究報告』九一 一五一—一六五  
笠井藍水編 一九五七 『美馬郡郷土誌』 美馬郡教育会  
角川日本地名大辞典編集委員会編 一九八六 『角川日本地名大辞典 徳  
島県』 角川書店  
金沢治 一九七四 『日本の民俗 徳島』 第一法規  
喜多村理子 一九八五 「盆を迎える霊についての再検討—先祖を祭る場所  
を通して」 『日本民俗学』一五七・一五八 一〇三—一七(のち  
に大島建彦編 一九八八 『無縁仏』 岩崎美術社に収録)  
喜多村理子 一九九八 「盆と節供」 赤田光男他編『講座日本の民俗六  
時間の民俗』 雄山閣 一七〇—一八四  
小松理子 一九七六 「新仏の祭り—新設される棚の設置場所を中心とし

て」 『民俗と歴史』三 民俗と歴史の会 一九〇—二六

近藤直也 一九八二 『葎の構造』 創元社

庄武憲子 一九九九 「穴吹町の盆行事」 『総合学術調査報告・穴吹町』  
(阿波学会紀要四五) 二七一—二七六

庄武憲子 二〇〇三 『徳島県の盆棚』 『徳島地域文化研究』一 一七  
—一八

高谷重夫 一九八五 「餓鬼の棚」 『日本民俗学』一五七・一五八 一  
三三—一四六(のちに高谷重夫 一九九五 『盆行事の民俗学的研究』

岩田書院 に収録)

高谷重夫 一九九五 『盆行事の民俗学的研究』 岩田書院

武田明 一九五五 『祖谷山民俗誌』 古今書院

田中久夫 一九八六 『祖先祭祀の歴史と民俗』 弘文堂

徳島県教育委員会編 一九七八 『徳島県民俗地図』 徳島県教育委員会

徳島民俗学会 一九八五 「徳島の盆習俗」 阿波学会編『阿波学会三十  
年史・記念論文集』 三八九—四一七

半田町誌出版委員会編 一九八一 『半田町誌 下巻』 半田町誌出版委  
員会事務局

文化庁編 一九六九 『日本民俗地図 年中行事Ⅰ 解説書』 国土地理  
協会

三加茂町史編纂委員会 一九七三 『三加茂町史』 徳島県三好郡三加茂  
町

三野町誌編集委員会 一九七四 『三野町誌』 徳島県三好郡三野町

美馬町史編集委員会 一九八九 『美馬町史』 徳島県美馬郡美馬町

三好町史編集委員会編 一九九六 『三好町史 地域史・民俗編』 徳島  
県三好郡三好町

民俗学研究所編 一九五六 『綜合日本民俗語彙』五 平凡社  
最上孝敬 一九八四 『靈魂の行方』 名著出版  
柳田國男 一九六二 『先祖の話』 『定本柳田國男集』一〇 筑摩書房  
一一〇一五二

(高橋晋一 千七七〇—八五〇二 徳島市南常三島町二—)

徳島大学総合科学部)

(黒田幸子 千七七〇—〇八一三 徳島市中常三島町二—一九 友朋寮)